

Dorfgeschichten aus dem Vormärz

宮野悦義

本書は十九世紀ドイツのフォアメルツ期に隆盛をみた「ドルフゲシヒテ」——必ずしも適切な訳語とは思われないのだが、以下通常用いられる表記に従って「村の物語」とする——というジャンルの作品14編を収録した2巻本のアンソロジーである。ここでいうフォアメルツは一般的な1830-1848年ではなく、1840年以降に限定されるが、それはこのジャンル名のおよその成立時期と関連するためである。

この「村の物語」という呼称を一躍有名にしたのはユダヤ系作家のベルトルト・アウエルバハ（1812-1882）で、1842年に発表された彼の短編集『シュヴァルツヴァルトの村の物語』が当時大評判となった。ちなみに、この作品の評判は単にドイツ国内にとどまらず、1844年にはフランス語に、1846年にはイタリア語、スウェーデン語に翻訳され、さらに1868年のロシア語訳にはツルゲーネフが序文を書いたほどである。こうしてその後のドイツ国内にはこの種の作品が氾濫することになり、「村の物語」はジャンル名として定着する。アウエルバハはヘーベルに少なからず影響を受けているから、ヘーベルの『カレンダーゲシヒテ（暦物語）』が彼の作品名に、従ってはこのジャンル名の誕生に関係していることは疑いない。

さて、この名称の創始者を主張する作家がもう一人いる。それは同じくユダヤ系ジャーナリスト、著述家で「青年ドイツ派」の作家とも接触のあったアレクサンダー・ヴァイル（1811-1899）で、後にハイネの序文付で刊行されることになる彼の『エルザスの庶民の暮しの風俗画』（1847）の一部が、1839年に雑誌に発表された。その際、編集者（カール・グツコウ）の意向で『エルザス地方の村の物語』という原標題が上記の標題に変更された、従って本来は自分が創始者だということのである。ハイネは上に述べた序文で彼の主張を紹介しているが、「最初のドルフ・ノヴェレ（農村小説）の作家」という表現を用いており、ヴァイルの意図には、従ってはその当時のドイツにおける「村の物語」ブームにはさほど関心がなかったようである。（ついでながら本書の編集にあたったキルヒャーは、「村の物語」という名称をサブタイトルとして最初に用いたのは、上記兩名のいずれでもなく、1841年の『ウラーニア』（小型年鑑本）に掲載されたボホハマの作品が最初だと述べているが、詳しい内容についてはそれ以上触れていない。）

さて成立時期の問題はともかく、問題は「村の物語」の概念規定であろう。ところがこれがまた一筋縄ではいかない難問で、これまでにさまざまな試みが見られるものの（本書の編者キルヒャーは巻末の後書きでその代表的な見解をいくつか紹介している）、いずれも明確にジャンルの特徴を捉えているとは言い難いのである。いずれにせよ、このジャンルが村を舞台に農民を扱う叙事文学の一形態であることは確かなのだが、そうなるとグリーンメルスハウゼンやゲスナーに始まる一連の系譜（『村の物語』（1976）という研究書の著者ユルゲン・ハインは17世紀から現代に至る数百におよぶ作品のクロノロジーを紹介している）のなかで、このジャンル

が占める位置、その特性が問われることになる。そこで本書の編者キルヒャーは、「村の物語」というジャンル形成に直接意味をもつと考えられる先駆的作家、作品に焦点を絞り、そこに見られる異質な二つの文学伝統の合流点に「村の物語」を位置付ける。その一つはヒルツェル、ベスタロッチに代表されるスイスの社会教育的な文学の伝統であり、いま一つはゲスナーに代表されるバロックの牧歌、田園文学の系譜で、フォスやヘーベルを経てこの時代に及ぶ。従って、農民啓蒙的な意図をもった進歩的な傾向と、失われた楽園への郷愁という後ろ向きの傾向との同居が「村の物語」の特徴であり、これこそ政治的フォァメルツと回顧的ピーダーマイヤーという二つの潮流の併存する時代状況をまったく見事に物語るジャンルだというのである。従って重点の置きかた如何では一方に傾斜した評価しか生まれない。編者は、「村の物語」は社会的に反動的な形で田園という理想を補強するもの、とするフリードリヒ・ゼングレの見解や、フォァメルツ期の「村の物語」は市民革命的な意味で明確な政治的機能を果たしていた、とするウーヴェ・パウルの評価の例を紹介しているが、このいずれの立場に立っても「村の物語」の多様性、またこのジャンルが大流行した時代状況を正しく把握したことにはならない。こうして編者キルヒャーは、一元的な評価を戒める上記の立場から、12名の作家による14編を選び、作品を通して「村の物語」の特質を示そうとするのである。そこでキルヒャーの意図に従って個々の作品を見ることにしよう。

まずはこのジャンル流行の火付け役となったアウエルバハだが、本書には『不器用な男』と『権力者たち』の2編が収められている。前者は貧しく人のいい若者の「不器用な」恋を描いたもので、主人公は兵隊になることで彼なりの出世を目論むのだが結局は失敗、その恋も実らずついにはアメリカへ渡ることになる。貧しさ故のアメリカ移住はフォァメルツ期のドイツの大きな特徴で、特に1846/47年の飢饉が契機となって多数の農民が移住するのだが、1842年のこの作品にもすでにその反映がみられる。しかしこの作品の持ち味は、そうした社会性よりはむしろ、農村の暮しの牧歌的な描写にある。もう一つの作品は、一本の縦の木を切り倒し、昔の習慣に従って恋人の家の前に立てた若者が罪に問われる話で、ここでは司法制度の欠陥にたいする作者の憤りが感じられる。またこの物語には第2部があって、もう一つ別の「お上」の横暴ぶりが描かれ、伝統的な権利を侵害された農民たちが集団で抗議行動を起こすのだが、ここでアウエルバハはそのリーダーにこう語らせている。「わしらがあんた方に金を払っているのは、村を守ってもらうためで、いじめられるためじゃねえ。あんた方は国に仕える人たちじゃが、その国ちゃっはわしら市民なんじゃ。」この（およそ農民のものらしからぬ）科白に、かつて政治犯として禁固刑に処せられた経験のある自由主義者アウエルバハの素顔を見ることが出来る。しかし、この作品の場合も、都市の読者を意識した感傷的な田園賛美が全体としての社会性・政治性を希薄なものにしている。（ちなみに、「村の物語」の主たる読者層は農民ではなく、むしろ都市住民である。この「村の物語」は受容の観点からも検討される必要がある。）

編者キルヒャーは、アウエルバハの理論的な著作『書物と大衆』（1846）に示される文学綱領から、「老いたベガサスは、生活の大地に立つ四本の足のほかになお、心のおもむくままに自由に羽ばたく二つの翼をもっている」という文を引用し、アウエルバハに「文学の世界から極端なリアリズムを排除しようとする」姿勢のあることを指摘している。貧しい人々の哀しみ、苦しみを聞き逃していいというのではない、しかし、「文学には厳しい冬ではなく、優しい春に遊ぶことが、人々とひもじい思いを共にするのではなく、晴着を着た人々のダンスの楽しみ

のお供をすることが許されるし、許されねばならない」(アウエルバハの前掲書からの引用)。「村の物語」の特質を、牧歌の系譜と啓蒙主義の系譜の、ピーダーマイヤーとフォァメルツの合流とみるキルヒャー見解は、アウエルバハの作品分析においてはきわめて有効であり、説得性をもつ。

本書第1巻にはこのアウエルバハの作品のほか、先にふれたヴァイル、さらにはマルカート、シルゲスの作品が年代順に収められている。いずれも上述の「村の物語」の基本的性格に大きな変更を加えるものではないが、すでにもうこのジャンルの多様な展開を予測させるものがある。マルカートの『農民いじめ。どこにでもある話』は、農民から家屋敷を収奪する高利貸の巧みな手口を扱った作品で、収奪される農民にたいする著者の同情が読み取れることはいまでもないのだが、他方ではドイツ農民の頑固な保守的気質を賛美する傾向が見受けられる。シルゲスの『アイラースローデのオルガン弾き』では、農民が主人公ではないが、空席となった村のオルガン奏者の地位をめぐる争う二人の候補者(いずれも職人)の惨めな境遇を中心に、役人、牧師、教師などの人物像が的確に描写されていて、当時の村落共同体の実情が浮き彫りにされる。

『シュヴァルツヴァルトの村の物語』の適度の感傷性と適度の社会性は、1840年代初期の時代状況にも呼応し、このジャンル創始者の巧みな語り口とあいまって、多くの支持者を得ることができた。しかし、やがてドイツ全土を覆う政治状況の緊迫化が「村の物語」にもさまざまな影を投げかける。この時期の「村の物語」作家の大半は(アウエルバハも含めて)、なんらかの形で当時の政治運動に関わりをもち、警察の記録にも名をとどめる人物が少なくない。1844年の織工暴動がさまざまな文学作品の主題になったように、1846/47年の農業飢饉に代表される当時の逼迫した農村事情が、やがて「村の物語」の主題として浮び上がってくる。

本書第2巻の冒頭に収録されたカール・ベックの作品は、いわば第1巻の作品にたいするアンチテーゼである。「村の物語」のジャンルに詩を含めることができるのかどうかは疑問のあるところだが、ベックのパラード『もう一つの村の物語』は、その題名からも明らかなように、このジャンルの在り方にたいする問題提起の意味をもつ。抒情詩人であると同時に真正社会主義者でもあったベックの本領は、もとよりラディカルな社会批判にある。舞台をスコットランドに設定し、「昔々…」というメーレン調を装いながらも、ドイツの農民にたいする、抑圧者への激しい抵抗の訴えという性格を隠してはいない。同時に、彼のプロテストの対象となるのは、厳しい農村事情をなおも美的なオブラートに包んで表現しようとする一連の「村の物語」、そしてその作家たちである。

ドロンケの『五月祭の女王』では、進歩的な考えをもつ学生、地主の娘、民俗学に関心をもつ教授などの多彩な人物を脇役に、かつて地主に人生を狂わされた貧しい森番の復讐が描かれる。都市の最下層住民を扱い、ドイツ最初のプロレタリアート小説となった同年の『警察物語』とは違って、ドロンケのこの作品はいささか散漫な印象(アウエルバハ流の感傷性も欠けてはいない)を与えるが、たとえば貧しい娘アンネの、「でも何十万という人たちが同じ状況のなかで惨めに落ちぶれてゆくのだとしたら、そんな状況を変えることができなきゃ嘘だわ」という科白には、初期社会主義の作家ドロンケの本領がうかがわれる。

また、「週のうち3日は地主の賦役に出る、3日は自分の畑の奴隷、そして日曜は教会の聖母に仕える」という、ボヘミヤの農民の惨めな生活を背景に、そこで起る土地収奪、そして燃

え盛る畑のなかで自殺する主人公の絶望的な抗議行動を描いたヘラーの『ボヘミヤの農民』にも、政治的に変貌をとげた「村の物語」の典型をみることができる。ただしこの作品の後半に描かれる惨めさからの脱出が、フリーメーソンを思わせる曖昧な展開になっていて、「村の物語」としては異色の結末になっている。後の婦人運動の先駆者ルイーゼ・オットーの作品は、農民蜂起を描いてやはり鋭い社会批判を含んでいる。蜂起する農民の要求の正当性を理解し、みずからの特権的な身分を放棄しようとする貴族の娘には、明らかに作者自身の姿が投影されているといえよう。また、声高に抗議をするわけではなく、個人的な運命や葛藤を淡々と描きながらも、結果としては暗い農村の実情を静かに訴えるランクの『イルカーとその妻』にも、やはりアウエルバハとは異なる「村の物語」の新たな展開をみることができよう。

収録されたシュレーンバハの二つの作品はもっともラディカルな「村の物語」である。とりわけ『12人の使徒』では、1844-1845年の厳冬期に、飢餓と凍死の危険に晒された村人たちの中から、12人の男たちが選ばれて町の役所へ出向く。彼らは村人たちの危急を救うために、職を求めねばならない。しかし郡の長官は、みずぼらしい身なりの彼らに無頼の徒とみなし、冷たく追い返す。彼らがついに残された唯一の生きる道、放火と掠奪を決断する。もう一つの作品『兎わな』も、警察と司法の手で破滅へと追いやられる主人公の姿が、残酷なまでのリアリズムで描かれる。農業経済学者で、当時の農村事情に通じていた彼の作品は、いささかも俗受けを意識したところのない、初期自然主義的なスタイルで貫かれている。

自らも革命運動に加わり、終身禁刑の監獄から脱出した経験をもつキンケルの『故郷なき人々』では、飢饉に苦しむ主人公が鉄道建設現場にいわば「出稼ぎ」にでるのだが、時代の象徴ともいべきこの大事業に従事する労働者たちのもとで、彼は次第に新しい理念に目覚めてゆく。しかし、1848年革命の挫折とともに夢潰えて、ついにはアメリカに新天地を求めることになる。

以上紹介した本書第2巻の作品は、いずれも1846年以降のものであり、政治の季節フォアメルツの一般の状況を如実に反映した、緊迫感あふれる作品が主体で、ここには田園的・牧歌的要素はほとんど影をひそめている（ホルンの『代父シュヴァンダ』という村の音楽家を主人公にした幽霊話が唯一の例外であろう）。しかし、1848年革命の挫折とともに、大きく政治的に傾斜した「村の物語」にも再び転機が訪れる。これ以降の展開については、本書の範囲を超えることになるのだが、編者キルヒャーが始めに定義した二つの系譜のうちの後者、つまり牧歌的ピーダーマイヤーの要素が再び浮上してくることは容易に想像できる。例えば1856年に発表されたアウエルバハの『裸足の娘』は、主人公の清純さ、無邪気さが売り物の、いわば小型シンデレラ物語である。ここではアメリカに夢を託すのではなく、美德の褒美としての大農の息子との結婚によって、惨めな境遇から浮上することになるのである。挫折感がますます政治的・社会的な視点から著者を、そして読者を引き離し、芸術のなかに幸福な世界を求めさせる。感傷的な牧歌への回帰が、大評判となったこの作品の特徴であり、「村の物語」のその後の展開を象徴的に物語ることになる。

ここに収録された14編の「村の物語」は必ずしも文学的に価値の高いものではなく、また、このジャンル自体もやがては自然主義文学の領域に吸収されていく運命にある。しかし、これと時期を同じくする政治詩の流行とともに（これもまたハイネの言葉を借りれば「才能はなけれど節操あり」ということになる）、フォアメルツ期のドイツの文学的状況、ひいては当時の

社会状況を知るためには欠かせない、貴重な資料価値を有している。編者キルヒャーの巻末の解説はきわめて適切であり、また、今はもう顧みられることのない作家たちの略歴はきわめて興味深い。

最後に本書に収録された「村の物語」の一覧（年代順）を掲げておく。

Alexander Weill: Selmel, die Wahnsinnige. Ein Sittengemälde aus dem Elsaß
(1840)

Berthold Auerbach: Der Tolpatsch (1842) ; Befehlerles (1842)

H. E. Marcard: Der Bauernschinder. Eine Geschichte wie es viele gibt (1844)

Georg Schirges: Der Bälgentreter von Eilersrode. Niedersächsische Dorfgeschichte
(1845)

Karl Beck: Auch eine Dorfgeschichte (1846)

Ernst Dronke: Die Maikönigin (1846)

Uffo Horn: Gevatter Schwanda (1847)

Isidor Heller: Ein böhmischer Bauer (1847)

Josef Rank: Der Irrker und sein Weib (1847)

Carl Arnold Schloenbach: Die Hasenschlinge (1848) ; Die zwölf Apostel (1848)

Louise Otto: Die Lehnspflichtigen (1848)

Gottfried Kinkel: Die Heimatlosen (1849)

Hartmut Kircher (Hg.): Dorfgeschichten aus dem Vormärz. 2 Bde.
Köln, c. w. leske Verlag, 1981. 300+367 S.